



鶴見大学図書館 第159回貴重書展

# 与謝野晶子の『源氏物語礼讃』

2024.1.20 (土) - 2.24 (土) [入場無料]

鶴見大学図書館 1階エントランス 月~金 8:50~21:00 | 土 8:50~18:00 | 日 祝 休館

《主な展示品》

与謝野晶子自筆「源氏物語礼讃」(歌帖)|同(色紙)|「源氏物語」(『梗概源氏物語』自筆原稿)|自筆書簡|『新訳源氏物語』|『新新訳源氏物語』  
『みだれ髪』|『光る雲』|『流星の道』|「源氏物語」伝尊鎮法親王筆|「源氏物語」無刊記小本|本居宣長『源氏物語玉の小櫛』寛政11年(1799)刊

【講演会】2024.2.24 (土) 11:00~12:00 鶴見大学図書館 地下ホール [入場無料]

「鶴見大学図書館蔵『源氏物語礼讃』」講師 田口暢之(日本文学科准教授)

鶴見大学図書館 [交通] JR鶴見駅より徒歩10分・京急鶴見駅より徒歩15分

HP <https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/library-official/> X [https://twitter.com/tsurumiuniv\\_lib](https://twitter.com/tsurumiuniv_lib)



## ごあいさつ

明けましておめでとうございます。新春の貴重書展は源氏物語研究所が担当しています。

今年は大河ドラマで紫式部が取り上げられ、『源氏物語』への関心も今まで以上に高まっています。すでに現代語訳も多く刊行されていますが、初めて全巻にわたって訳したのは与謝野晶子（1878～1942）でした。晶子は幼少期から『源氏物語』に親しみ、34歳で『新訳源氏物語』を、60歳で『新新訳源氏物語』を出版しました。ほかに注釈や要約などにも取り組んでいます。

そのなかで、『源氏物語』の内容を1巻につき1首、計54首の短歌に詠んだ「源氏物語礼讃」は、歌人として著名な晶子ならではの作品と言えるでしょう。晶子はそれを短冊、色紙、屏風、巻物などに揮毫しています。大正12年（1923）8月には雑誌『明星』（第2次。4巻2号）に、特別に仕立てた「源氏物語礼讃」を先着1名に販売するという広告が掲載されました。それは「空前の一大歌帖」「桐箱入」「高島屋特製」「一巻のみ」などと謳われた豪華版でしたが、その行方は長らく不明となっていました。

近年、鶴見大学図書館に2種類の「源氏物語礼讃」が収蔵されました。その1つは桐箱の蓋に「大正十二年六月」と晶子自筆で記され、特徴も上記の広告に一致します。つまり、『明星』で宣伝された豪華版が約100年ぶりに出現したわけです。もう1つの「源氏物語礼讃」もこれまで知られていなかった新出の色紙と思われます。そこで、今回は「源氏物語礼讃」を中心として、晶子と『源氏物語』に関する資料を展示することに致しました。

「源氏物語礼讃」はこのように何種類も現存していますが、それぞれの内容は少しずつ異なります。つまり、繰り返し推敲されているのです。したがって、堅実な研究をするには、タイトルが同じであっても、さまざまな種類を見比べる必要があります。これは他作品においても同様です。源氏物語研究所が『源氏物語』を中心とする古典籍の蒐集に尽力しているのも、そのためです。

今回の展示は近代の作品がメインとなりました。挿絵から表紙・箱に至るまで、色彩豊かな趣向を凝らしたものが目立ちます。文学的な面はもとより、美術的な面からもお楽しみください。

2024年1月 源氏物語研究所

## 展示品リスト

- |  |  |
|--|--|
| 1、晶子「源氏物語礼讃」1帖。＊自筆。・・・2                  | 8、晶子『瑠璃光』1冊。＊初版。・・・5                             |
| 2、第2次『明星』4巻2号。1冊。・・・2                    | 9、晶子『流星の道』1冊。＊初版。・・・5                            |
| 3、晶子『みだれ髪』1冊。＊初版。・・・2                    | 10、晶子「源氏物語」2帖（原稿用紙70枚）。<br>＊自筆。＊『梗概源氏物語』に影印。・・・5 |
| 4、晶子『光る雲』1冊。＊初版。・・・2                     | 11、晶子『新新訳源氏物語』6冊。＊初版。・・・5                        |
| 5、晶子『新訳源氏物語』4巻。・・・2                      | 参考4 『源氏物語』54帖。〔室町末期〕写。・・・5                       |
| 参考1 『湖月抄』60冊。＊吉田版。・・・3                   | 12、「新新訳源氏物語完成記念祝賀会」案内状・6<br>〔寛政11年（1799）〕刊。・・・4  |
| 参考2 『源氏物語玉の小櫛』9冊。<br>〔寛政11年（1799）〕刊。・・・4 | 13、晶子関係書簡。・・・6                                   |
| 参考3 『源氏物語』30冊。〔寛文頃〕刊。・・・4                | 14、晶子「中部山岳抄ノート」1冊。＊自筆。・・・6                       |
| 6、晶子「源氏物語礼讃」色紙55枚。＊自筆。・・・4               | 凡例。・・・7  |
| 7、第2次『明星』1巻3号。1冊。・・・5                    |  |

1、与謝野晶子「源氏物語礼讃」54首。折帖1帖。大正12年（1923）6月。\*晶子自筆。

登録番号、1408639。色紙、縦21.1cm×横18.0cm。上青下紫の雲紙。字高、約15.2cm（桐壺巻による。散らし書きの仕方により異なる）。「源氏物語礼讃」54枚に加え、冒頭に「源氏物語礼讃」、巻末に「与謝野晶子」と記した色紙、各1枚。

折帖、縦30.5cm×横30.3cm×高さ4.0cm。灰色地に緑・紫・青などの菊花紋を織り出した絹表紙。中央の金色絹題簽（縦19.0cm×横5.5cm）に「源氏物語禮讃 晶子」と墨書（晶子自筆）。見返しと色紙の台紙は金揉泊散らし。小口は四方とも金。

帙、縦31.0cm×横30.5cm×高さ4.7cm。緑地に茶色と赤の横線を細かく引く。中央の絹題簽（縦22.5cm×横6.1cm）に「源氏物語禮讃」と墨書（晶子自筆）。帙の裏地は金揉泊散らし。

桐箱、縦34.1cm×横33.8cm×高さ7.1cm。蓋の表の中央に「源氏物語禮讃」と墨書（晶子自筆）。蓋の裏の右端に「大正十二年／六月／与謝野晶子」と墨書（晶子自筆）。

掲出したのは末尾の部分。晶子は大正8年（1919）の年末に「源氏物語礼讃」を詠みはじめて以降、歌の差し替えや歌句の変更などを繰り返し行い（「6」参照）、とくに末尾の推敲が目立つ。

2、第2次『明星』4巻2号。1冊。「明星」発行所刊。大正12年（1923）8月。\*個人蔵。

縦23.6cm×横18.7cm。『明星』は晶子の夫である鉄幹が結成した東京新詩社の機関誌。明治33～41年（1900～8）に100号を刊行して廃刊。その後、大正10年（1921）に第2次の刊行が始まった。掲出したのは「源氏物語礼讃」の広告。「1」は同じ特徴を持ち、この「一大歌帖」に当たる。

3、与謝野晶子『みだれ髪』1冊。東京新詩社・伊藤文友館刊。明治34年（1901）。\*初版。

鶴見大学図書館には初版が2部所蔵される。表紙を展示した方は縦19.4cm×横8.5cm（登録番号、1113818）。歌を掲出した方は下部の余白が切断され、縦16.2cm×横8.3cm（登録番号、1046952）。奥付はともに同じ。晶子の第1歌集。情熱的な内容が反響を呼んだ。藤島武二による装訂で、扉に「表紙画、みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて、矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」（新字に改め、読点は私意）と説明されている。

当時、晶子は23歳であった。掲出したのは「行幸源氏」と『源氏物語』を詠んだ歌。

4、与謝野晶子『光る雲』1冊。実業之日本社刊。昭和3年（1928）。箱入。\*初版。

登録番号、1047110。縦19.3cm×横14.0cm。背表紙のみ「感想集 光る雲」と題す。

晶子が50歳のときの随筆。幼いころから『源氏物語』に親しんでいたことを回想する。

5、与謝野晶子『新訳源氏物語』4巻

『源氏物語』全巻にわたる現代語訳は前例がなく、人気を博して何度も出版された。

①4冊。金尾文淵堂刊。明治45年（1912）～大正2年（1913）。箱入。\*初版（第2～4冊）。

登録番号、0350412～5。第1冊は明治45年（1912）2月15日印刷、同21日発行、大正元年（1912）10月21日第8版発行（なお、上巻の初版は②を参照）。序文は上田敏、森鷗外の順。

第2～4冊は初版。いずれも縦22.4cm×横14.8cm。箱は縦23.0cm×横15.0cm。天金。中澤弘光による装訂・挿絵。表紙と箱、各冊の見返しと扉、および各巻頭を色彩豊かな絵が飾る。

②4冊。金尾文淵堂刊。明治45年(1912)～大正2年(1913)。箱欠。\*初版。

登録番号、0038570～3。掲出したのは第1冊と第4冊。第1冊は明治45年(1912)2月5日印刷、同11日発行で、おなじ初版でも①より早い。序文は森鷗外、上田敏の順になっている。4冊とも表紙欠。第1冊の桐壺巻冒頭では、光源氏の父桐壺帝を「二十になるやならずの青年」と記す。しかし、原文には該当箇所がない。これは第4冊の「新訳源氏物語の後に」で晶子自身の言う「自由訳を敢てした」部分で、おおむね妥当である(田坂憲二「桐壺院の年齢一与謝野晶子の「二十歳」「三十歳」説をめぐって」〈佐藤泰正編『源氏物語の愉しみ』笠間書院、2009年)。

③4冊。金尾文淵堂刊。大正3年(1914)。箱欠。箱入(第4巻のみ)。\*縮刷版。

箱欠の全4巻(12～3版。登録番号、1041606～9)と箱入の1冊(第4巻。登録番号、1113800)が所蔵される。後者は大正3年(1914)12月25日印刷、同31日縮刷発行。縦17.2cm×横11.1cm。天金。箱は濃紺で、縦17.7cm×横11.2cm。有島生馬による装訂。①や②と異なり、扉や巻頭の挿絵はない。縮刷に際して晶子は本文を改訂し、桐壺帝の年齢は「二十」から「三十」に改められたほか、細かい表現もかなり変更された(前掲田坂論文参照)。

④2冊。金尾文淵堂刊。大正15年(1926)。箱入。\*縮刷版。

登録番号、1041598～9。上下巻とも大正3年(1914)12月31日縮刷発行。上巻は同15年(1926)4月15日合本印刷、同21日合本発行。縦17.7cm×横11.2cm。箱、縦18.6cm×横11.7cm。下巻は昭和2年(1927)3月10日合本印刷、同15日合本発行。縦17.6cm×横11.2cm。箱、縦18.3cm×横11.4cm。天金。奥村土牛による装訂。梶田半古による挿絵が各巻頭を飾る。

⑤2冊。大鏡閣刊。大正15年(1926)。

登録番号、1041612～3。大正15年(1926)2月5日印刷、同10日発行。縦22.4cm×横15.8cm。天金。①②を上下2冊とし、表紙を竹に藤の絵に改め、各巻頭の挿絵をモノクロにしたもの。表紙の絵は①第1冊の箱の絵と類似する。本文は①②と同じ。桐壺帝の年齢を「二十」とする。

⑥1冊。新興社刊。昭和7年(1932)。

登録番号、1041597。昭和7年(1932)7月5日印刷、同8日発行。⑤を1冊にまとめたもの。縦19.0cm×横13.3cm。天金。この本文も①②と一致。

なお、昭和10年(1935)には大きさや装訂は同じまま四分冊にされ、それぞれに紅葉を描いた箱が付けられる。掲出したのは昭和13年(1938)の5版(登録番号、1048058～61)の第1冊。

[参考1] 北村季吟『湖月抄』60巻。袋綴60冊。延宝元年(1673)跋。\*吉田版。

登録番号、0112257～316。本文54巻、発端1巻、系図1巻、年立2巻、表白1巻、雲隠説1巻。紺色無地表紙。縦27.2cm×横19.3cm。表紙中央の単棹刷題簽(縦18.3cm×横3.7cm)に「湖月抄〔各巻名・巻数〕」。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。匡郭、縦23.0cm×横17.3cm。版心には「桐一」のごとく各巻名の略称と丁数を記す。刊記、夢浮橋巻末に季吟の跋に続けて「書林和泉／村上勘兵衛／吉田四郎右衛門／村上勘左衛門」。蔵書印、各冊1才右下に「茗荷谷／文庫」の単棹朱陽方印(縦4.2cm×横4.2cm)。

『源氏物語』の本文と注釈を同時に読めるようにした本。それ以前は本文と注釈が普通別々であ

った。読みやすい『湖月抄』は江戸時代のみならず明治以降も『源氏物語』を読む際に多く用いられたが、晶子は「原著を誤る杜撰の書」（「5」②参照）と批判する。

掲出したのは椎本巻の一節。八宮は自らの死後、娘 2 人がどう暮らしていくのか心配し、右の丁の 1 行目「一所、世に住つき給よす／があらば」（1 人でも結婚できる縁があれば）と思う。

〔参考 2〕本居宣長『源氏物語玉の小櫛』9 巻。袋綴 9 冊。須受能耶蔵版。〔寛政 11 年（1799）〕刊。登録番号、0228115～23。浅葱色布目表紙。縦 26.7cm×横 18.5cm。外題、表紙左肩の単枠刷題簽に「玉の小櫛 一（～九）」（縦 19.2cm×横 3.7cm）。ただし、巻 1 の題簽には右上に「源氏物語」、書名と巻名の間に「本居宣長」と墨書。内題、「源氏物語玉の小櫛一の巻」。版心、「○玉のをくし〔巻数〕 ○〔丁数〕」。本文料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。匡郭、縦 19.6cm×横 14.4cm。第 1 冊冒頭に序があり、末尾に「神の宮人／藤井高尚」と署名。刊記、第 9 冊の裏見返し中央に「須受能耶蔵版」。蔵書印、各冊 1 オ右下に双枠朱陽楯円印「静修斎」（縦 4.2cm×横 2.9cm）、その下に単枠朱陽菱形印「島田」（縦 2.3cm×横 2.3cm）。

晶子は「只、本居宣長のみ、私はみとめ居り候」（明治 42 年（1909）9 月 18 日付け小林政治宛て晶子書簡。引用は植田安也子・逸見久美編『天眠文庫蔵与謝野寛晶子書簡集』八木書店、1983 年により、私に読点を付した）と言う。

掲出したのは「参考 1」と同じ部分。左の丁の後ろから 3 行目「湖月本に、一ところとのみある／は、雅言をしらぬ人の、さかしらにはぶきすてたる也」と言い、「一ところ一ところ」という本文を是とし、現代の注釈にも受け継がれる。こうした批判性を晶子も好んだのであろう。

〔参考 3〕『源氏物語』60 巻。袋綴 30 冊。無刊記。〔寛文頃〕刊。桐箱入。\* 絵入小本。登録番号、0132973～0133002。本文 54 巻、爪印 3 巻、系図 1 巻、山路の露 1 巻、引歌 1 巻。藍色地に唐草や瑞雲を艶出した表紙（原装）。縦 15.3cm×横 11.2cm。押発装あり。外題、表紙中央の原題簽（縦 10.0cm×横 3.9cm）に各巻名を刷る。内題なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。遊紙なし。匡郭、縦 11.5cm×横 8.6cm。毎半葉 11 行。蔵書印、「芦澤蔵書」。

晶子が読んでいたのと同じ種類の版本（晶子旧蔵本は鞍馬寺蔵）。掲出したのは椎本巻。匂宮は初瀬詣の帰り道、八宮邸の対岸にある夕霧の別邸で休息し、管弦の遊びをする。その音色に誘われ、八宮から和歌が贈られる。それを機に薫らは宇治川に舟を出し、八宮邸を訪れる。

## 6、与謝野晶子「源氏物語礼讃」54 首。色紙 55 枚。書写年未詳。桐箱入。\* 晶子自筆。

登録番号、1403901。色紙（緑・黄・桃・紫色などの色替わり。白の打曇）。55 枚（礼讃 54 枚と「源氏物語礼讃／与謝野晶子」と記した 1 枚）。縦 21.3cm×横 18.2cm。字高、約 16.0cm（桐壺巻による。散らし書きの仕方により異なる）。桐箱、縦 24.1cm×横 21.0cm×高さ 4.3cm。蓋の表の中央に金字で「源氏物語禮讃」、左下に「与謝野晶子」（それぞれ晶子自筆）。

大正 8 年（1919）の年末に晶子は初めて「源氏物語礼讃」を詠み、推敲を重ねて翌年 1～3 月には阪急東宝グループ創業者の小林一三（逸翁）らへ短冊を贈る（一三は晶子を経済的に支援していた）。そのときの書簡では「源氏物語礼讃」を活字にしないと述べている。

一方、当該資料は書写年や献呈先が不明であるものの、本文が特徴的である。椎本巻は「5」の場面を踏まえた「春の川遊仙窟のあたりまでゆくやと船の人にとはまし」という改作前のもの的一致。しかし、総角巻の 4 句「ねがひき身をば」は最晩年の「11」や「12」のみと一致。そして、東

屋巻の2句「中をきぬれば」、夢浮橋巻の2句「それと思ひて」は他に見えない独自の本文である。

7、第2次『明星』1巻3号。1冊。「明星」発行所刊。大正11年（1922）1月。

「2」と並べて展示してある資料。『明星』などについても「2」を参照。

晶子は当初の方針を変え、大正11年（1922）1月に「源氏物語礼讃」を初めて活字化した。

8、与謝野晶子『瑠璃光』1冊。アルス刊。大正14年（1925）。\*初版。

縦19.2cm×横14.0cm。前表紙と背表紙には「歌集 瑠璃光」と題す。

晶子は『新訳源氏物語』と並行して、実業家の小林政治（天眠）からの依頼で「講義」という注釈にも取りかかっていた。当初は百ヶ月計画であったが、思うように進まず、10年以上を費やし、原稿は数千枚から1万枚ほどに達していた。ところが、大正12年（1923）9月の関東大震災で文化学院（晶子が創設に関わった学校）とともに焼失してしまう。掲出した箇所ではその悲しみが歌われる。なお、「1」の「源氏物語礼讃」の歌帖はその直前の6月に揮毫されたもの。

9、与謝野晶子『流星の道』1冊。新潮社刊。大正13年（1924）。箱入。\*初版。

縦19.3cm×横13.5cm。晶子は「源氏物語礼讃」を『明星』に発表した後、歌集『流星の道』にも「絵巻のために」「源氏物語」と題して収録した。本文は「7」とほとんど同じである。

10、与謝野晶子「源氏物語」54巻。折帖2帖（原稿用紙70枚）。\*晶子自筆。

縦27.0cm×横19.0cmの折帖2帖にB4版の原稿用紙70枚（ほかに表紙代わりの1枚）を貼る。

『源氏物語』各巻の内容を要約したもの。活字化はされなかったようで、執筆の時期や経緯は未詳。原稿用紙に「十ノ二十 神楽坂山田製」とあるため、麴町区富士見町に住んでいた大正4年（1915）～昭和2年（1927）の執筆か（鶴見大学文学部編『梗概源氏物語』〈武蔵野書院、1993年〉の池田利夫氏による解説参照。同書に影印と翻刻も収められる）。掲出したのは桐壺巻。

11、与謝野晶子『新新訳源氏物語』6冊。金尾文淵堂刊。昭和13～4年（1938～9）。箱入。\*初版。

登録番号、1041600～5。第1冊は昭和13年（1938）10月17日印刷、同21日発行。正宗得三郎による絵。縦19.2cm×横13.8cm。各冊の冒頭には口絵、各巻の冒頭には晶子自筆「源氏物語礼讃」の色紙の写真がそれぞれモノクロで掲載される。箱は縦19.8cm×横14.2cm。

掲出したのは椎本巻の八宮が亡くなった場面。「1」などの「あけの月涙のごとく真白けれ御寺の鐘の水わたる時」はここを踏まえる（改作前の「6」とは全く異なる内容）。なお、晶子は『新新訳源氏物語』への掲載にあたり、宇治十帖の歌を中心として新たに大幅な改作を行っている（12参照）。

[参考4]『源氏物語』54巻。綴葉装54帖。伝尊鎮法親王筆。〔室町末期〕写。

登録番号、1435594～647。紺色無地表紙。縦22.5cm×横16.4cm。押発装あり。外題、表紙中央の金泥草花下絵朱題簽（縦10.7cm×横2.8cm）に各巻名を書写（本文別筆）。「こてふ」「まほろし」は縦11.1cm×横2.3cmの白題簽を後補。内題なし。料紙、斐紙。巻によっては楮紙。見返しも同じ。遊紙、前1丁、後は巻により異なる。毎半葉9行。和歌は改行2字下げで書き、末尾は地の文に続ける。字高、19.0～19.5cm。奥書、藤袴巻末に「依或仁所望染愚筆了（花押）親王」。蔵書印、各帖とも扉の右上に「由學館」の単棹朱陽方印（縦3.1cm×横1.3cm）。本文は寄合書で、書入

れ多数（朱・墨・合点。各書写者と同筆か）。桐箱入。箱の蓋に「尊鎮親王筆／源氏物語」と貼紙（本文別筆）。ただし、前掲奥書の花押は尊朝法親王（1552～97）のものか。掲出したのは夢浮橋巻。出家した浮舟は、失踪した姉を探しに来た弟にも会おうとしない。しかし、弟や母との思い出が蘇り、昔を「夢」のようだと思う。

## 12、「新新訳源氏物語完成記念祝賀会」の案内状。封書1通。昭和14年（1939）9月。

\* 「与謝野晶子関係資料」のうち。

登録番号、1145136。封筒、縦20.6cm×横8.3cm。祝賀会の案内状、縦18.4cm×横60.7cm。「源氏物語礼讃」頒布の案内状、縦18.4cm×横60.5cm。晶子は祝賀会で「源氏物語礼讃」を揮毫した。夢浮橋巻は「11」の場面に基づき改作されたもの。東屋巻や手習巻なども改作されている。

## 13、与謝野晶子関係書簡

### ①大正10年（1921）10月17日付、石川三四郎宛、晶子書簡。\* 寛筆。

登録番号、1100317。葉書1枚。縦14.3cm×横9.1cm。葉書裏面の右上に縦8.2cm×横3.4cmの晶子の写真あり。著書献呈の礼を記す。署名は「与謝野晶子拝」であるが、すべて寛の筆蹟（逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成2』〈八木書店、2001年〉171の注参照）。

### ②昭和7年（1932）6月22日付、与謝野アウギュスト宛、晶子自筆書簡。\* 晶子自筆。

登録番号、1057619。封書1通。封筒、縦20.9cm×横8.4cm。便箋、縦25.5cm×横17.5cm。便箋の中央に縦19.5cm×横13.6cmの黄色の枠、左下に「與謝野用箋」と印刷される。4男に現金を送った際の手紙。逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成3』（八木書店、2002年）112に該当。

### ③本美鉄三宛、小林政治（天眠）書簡4通。\* 政治自筆。\* 「与謝野晶子関係資料」のうち。

登録番号、1145136。いずれも縦14.0cm×横9.0cmの葉書。本美鉄三は実業家。「与謝野夫妻を殆ど偶像視した崇拜振りを發揮している」（斎藤昌三『閑板 書国巡礼記』東洋文庫639、1998年）とも評される。小林政治（天眠。「8」参照）も実業家で、与謝野家を経済的に支援し、晶子に『源氏物語』の「講義」を依頼した。彼らは与謝野夫妻の没後もさまざまな形で慕い続けた。

- ・昭和28年（1953）3月31日付。「与謝野夫妻を偲ぶ会」の案内。
- ・昭和29年（1954）5月15日付。第2回「偲ぶ会」の案内。
- ・昭和29年（1954）10月20日付。京都に建てた晶子の歌碑の除幕式の案内。
- ・昭和31年（1956）5月8日付。2日後にラジオ番組で晶子を取り上げられるという通知。

## 14、与謝野晶子「中部山岳抄ノート」。1冊。昭和11年（1936）。\* 晶子自筆。

登録番号、0156286。縦20.3cm×横16.1cm。30枚60ページ分のノート。罫線なし。表紙に「上河内へ」と記す。昭和11年（1936）8月に松永周二らと上高地、白骨、浅間を旅行したときの歌稿。雑誌『冬柏』7巻9号に「中部山岳抄」として結実した。池田利夫「与謝野晶子の草稿二題—本学図書館所蔵「梗概源氏物語」と「中部山岳抄作歌ノート」について—」（鶴見女子大学紀要21、1984年2月）参照。なお、「源氏物語礼讃」作成時にも同じようにノートが使われたという（与謝野秀『縁なき時計 続欧羅巴雑記帳』采花書房、1948年）。

## 凡 例

1. 書目は、原則として著者名、書名、装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「\*」以降にまとめた。
2. 編著者が未詳の場合は、著者名欄を省略した。また、『源氏物語』の著者名も省略した。
3. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
4. 推定記載は〔 〕、小字双行注は〈 〉に括り、2字以上の踊字は「／＼」、改行は「／」または「/」とし、丁の変わり目には「」を付した。
5. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例)「もみぢの賀」→「紅葉賀」
6. 漢字は通行の字体に統一した。
7. 古典本文の引用は断らない限り『新編日本古典文学全集』により、表記は改めた。
8. 解題執筆の際には、本学で開催された過去の展示解題のほか、以下の展示図録を参照した。
  - ・『藝林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』（1986年）
  - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』（1989年）
  - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（1994年）
  - ・『学校法人総持学園創立80周年記念和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書80選』（2004年）
9. 「源氏物語礼讃」については以下の先行研究を参照した。
  - ・新聞進一「与謝野晶子と「源氏物語」」（『古代文学論叢6 源氏物語とその影響 研究と資料』武蔵野書院、1978年）
  - ・ゲイ・ローリー「与謝野晶子の「源氏物語礼讃」一字治十帖の歌を中心に」（目白近代文学7、1987年3月）
  - ・市川千尋『与謝野晶子と源氏物語』（国研出版、1998年）
  - ・伊井春樹『与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」』（思文閣出版、2011年）
  - ・神野藤昭夫『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』（花鳥社、2022年）

## 展 示 担 当

表紙（ポスター）：伊倉史人（ドキュメンテーション学科）

解題：田口暢之（日本文学科）

第159回 鶴見大学図書館 源氏物語研究所 貴重書展

## 与謝野晶子の「源氏物語礼讃」

発行日：2024年1月20日

編集・発行：鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2丁目1-3